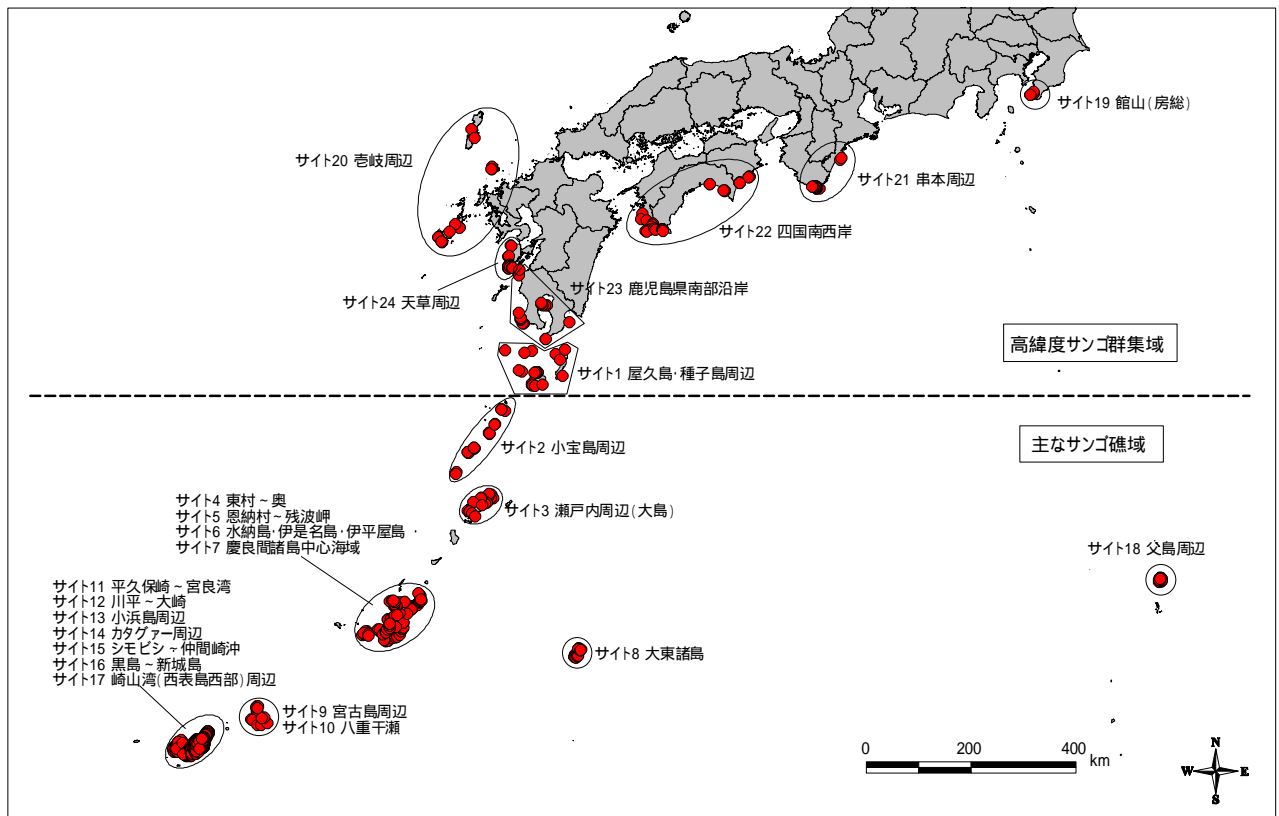


モニタリングサイト 1000 サンゴ礁調査

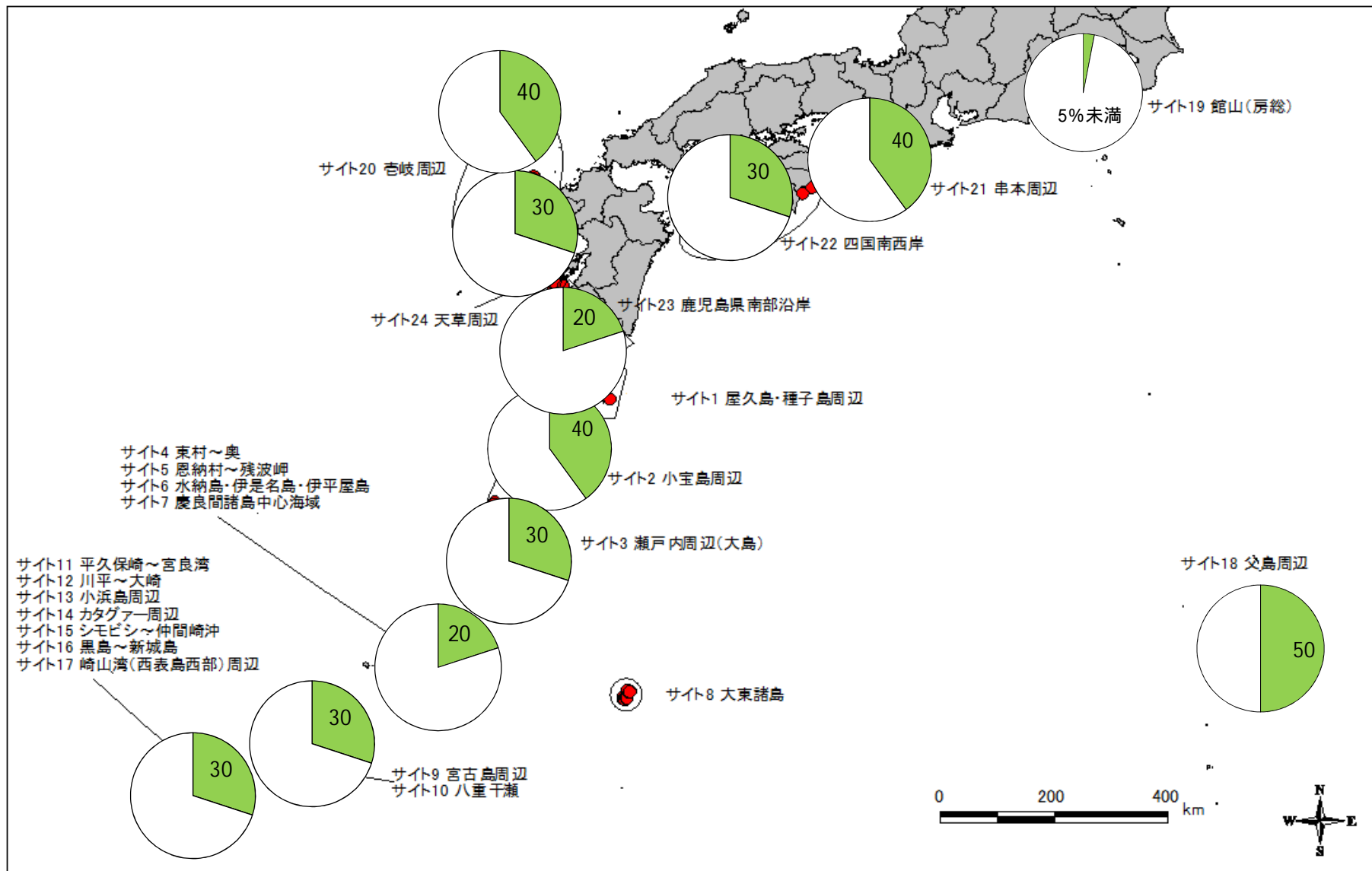
平成 26(2014)年度速報

モニタリングサイト 1000 サンゴ礁調査では、サンゴ礁の発達する「サンゴ礁域」とサンゴ群集が生育する「高緯度サンゴ群集域」に合計 24 の調査サイトがあり、毎年調査を行っています（小宝島周辺と大東諸島の 2 サイトは、遠隔地にあるため 5 年に 1 度実施します）。

ここでは、2014 年度の調査結果の概要をお知らせします。



モニタリングサイト 1000 サンゴ礁調査 サイト位置図



モニタリングサイト 1000 (サンゴ礁調査) における平成 26 (2014) 年度の各サイト又は海域の平均サンゴ被度 (%)

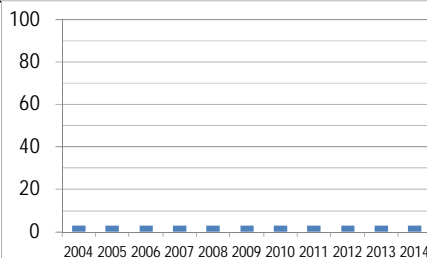
各サイト及び海域の概況

高緯度サンゴ群集域

モニタリングサイト 1000 サンゴ礁調査では、サンゴ礁を形成しない温帯域のサンゴ群集分布域のことを「高緯度サンゴ群集域」と呼び、屋久島とトカラ列島の間を境界にして、館山（サイト 19）から屋久島・種子島周辺（サイト 1）までのサイトを含みます。グラフは各サイト又は海域の平均サンゴ被度（％）です。

館山(サイト19) 調査代表者:お茶の水女子大学・清本正人

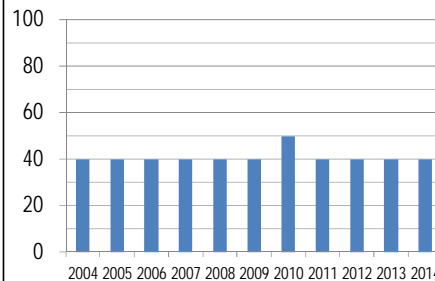
低い被度であるが、全体的には、昨年度から同様の状態が維持されている。以前みられたサンゴ食巻貝による被害は無く、キクメイシ類やミドリイシ類の小群体も見られた。



以前死亡した周囲が再生するキクメイシ類

串本周辺(サイト21) 調査代表者:串本海中公園センター・野村恵一

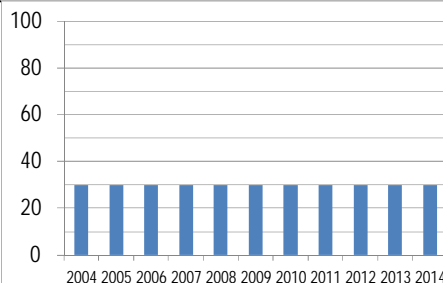
一部で台風による被害が見られ、感染症も観察されたが、平均被度は昨年と変わらなかった。オニヒトデは点在しているが、観察数は減少している。地点6ではスギノキミドリイシ群集の分布が拡大しつつある。



台風による被害を受けたクシハダミドリイシ

四国南西岸(サイト22) 調査代表者:黒潮生物研究所・目崎拓真

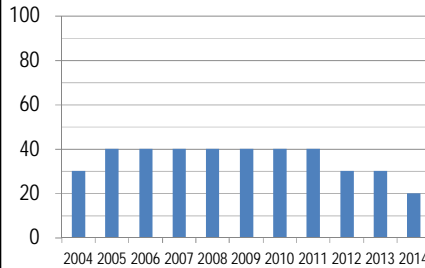
平均サンゴ被度が減少する程の大きな攪乱はなかったが、台風による破壊が多くの地点で観察された。一部ではまだオニヒトデの大集団が見られた。高水温による白化現象が観察されたが斃死はなかった。



オニヒトデによる食害(地点5:黒崎)

鹿児島県南部沿岸(サイト23) 調査代表者:ダイビングサービス海案内・出羽慎一

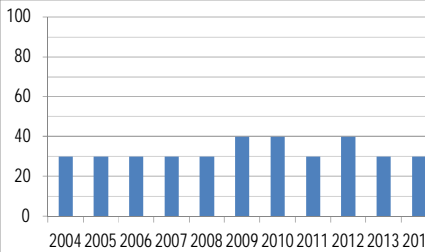
大型の台風による被害が各地で見られ平均被度が減少した。オニヒトデの観察数は減っているが生残したサンゴに食害が続いている。また、サンゴ食巻貝の被害も見られた。降灰被害は減少していた。



オニヒトデによる食害(地点1:身代湾)

天草周辺(サイト24) 調査代表者:九州大学・野島哲

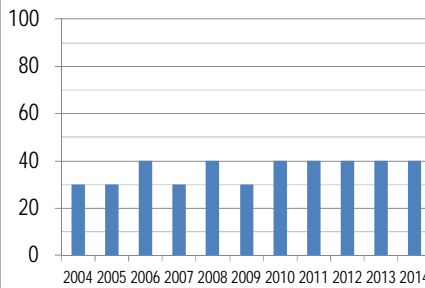
台風による被害が見られたが平均被度が減少する程ではなかった。一部ではオニヒトデの食害がまだ顕著であり、病気(杓付シンドローム)も多くの地点で観察された。



オニヒトデの食害(地点4:大が瀬)

屋久島・種子島周辺(サイト1) 調査代表者:屋久島海洋生物研究会・松本毅

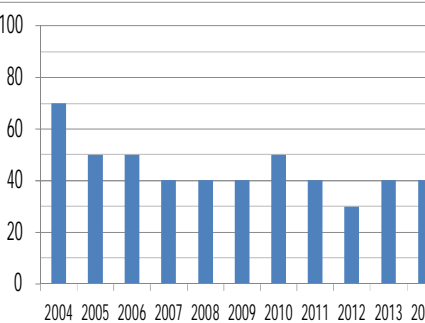
今年度は複数の台風が接近・上陸し、波浪による破壊などの影響が心配されたが深刻な影響はなかった。平均サンゴ被度値は昨年と変わらず40%。オニヒトデ食害や高水温による白化現象はなかった。



最も高被度のサンゴ群集(地点6センロク:60%)

壱岐周辺(サイト20) 調査代表者:国立環境研究所・杉原薫

顕著な減少傾向が認められた地点はなく、昨年度と同程度のサンゴ被度が維持されていた。ガンガゼやサンゴ食巻貝、及びオニヒトデによると思われる食痕がわずかに観察されたが、生体は確認できなかった。



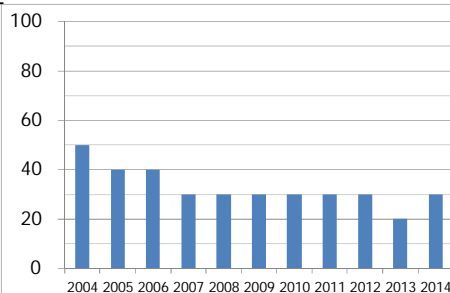
サンゴ食巻貝による食痕(地点7:板浦)

主なサンゴ礁域

主なサンゴ礁域とは、サンゴ礁を形成する亜熱帯域を指し、モニタリングサイト 1000 サンゴ礁調査では、小宝島周辺（サイト 2）以南のサイトを含みます。グラフは各サイト又は海域の平均サンゴ被度（%）です。なお、小宝島周辺（サイト 2）と大東諸島（サイト 8）は 5 年に 1 度モニタリングを行う遠隔地サイトであるため、2014 年度は調査を実施していません。

瀬戸内周辺(サイト 3) 調査代表者: ティダ企画有限公司・興克樹

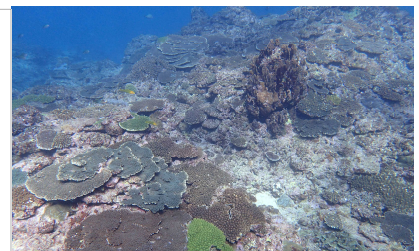
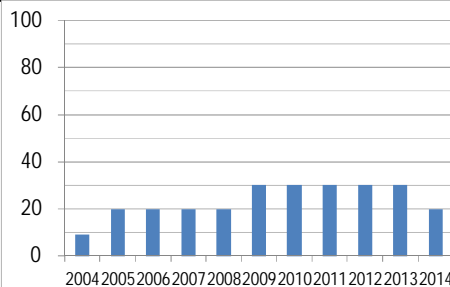
一部の地点で台風の影響を受けたが、サンゴ被度が増加した地点や小群体が散見できる地点が目立ち、今後の回復が期待できる。一部の地点で昨年観察された病気（ホワイトバンド病）の群体は減少した。



台風被害を受けた地点 15(安脚場)

沖縄島及び周辺離島海域(サイト 4~6) 調査代表者: 沖縄県環境科学センター・長田智史

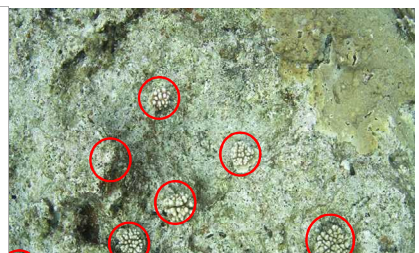
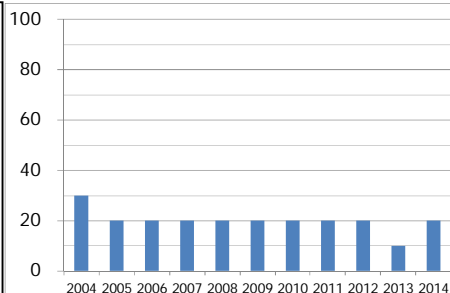
台風の被害を受けたためか、平均サンゴ被度が減少した。一部で高水温による白化現象が観察されたが、死はなかった。礁斜面では卓状ミドリイシ類が成長しており、今後の回復が期待できる。



卓状ミドリイシ類が大型化(沖縄島東岸)

慶良間諸島中心海域(サイト 7) 調査代表者: 阿嘉島臨海研究所・岩尾研二

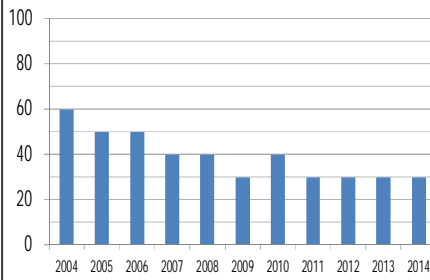
サンゴ被度はまだ低いですが、昨年観察された小群体の成長や、新たな小群体も多数観察され、やや回復傾向があらわれてきた。オニヒトデ観察数及び食痕数は昨年より減少したが一部で台風被害あり。



多くの小群体が観察された(渡嘉敷)

宮古島周辺及び離礁(サイト9、10)海域 調査代表者:宮古島市役所・梶原健次

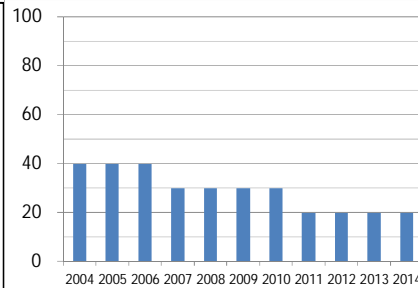
高水温による白化現象が観察されたが斃死には至らなかった。一部で見られたオニヒトデは減少傾向にあり、昨年観察されたサンゴの小群体の成長も見られ、今後の回復が期待できる。



成長する卓状ミドリイシ(地点6:来間東)

石垣島周辺(サイト11、12)海域 調査代表者:(有)海游・吉田稔

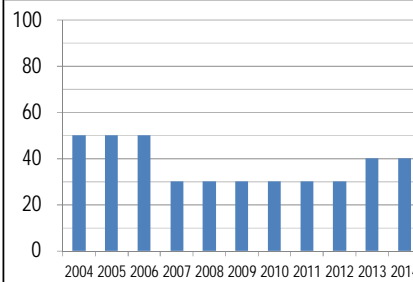
平均サンゴ被度は昨年と変化はないが被度が増加した地点が減少した地点を上回った。オニヒトデが観察されたのは2地点のみで大発生は収束したと思われる。9月頃に軽度の白化現象が観察された。



9月に観察された白化現象(石垣島西岸)

石西礁湖及び西表島周辺海域(サイト13~17) 調査代表者:自然環境研究センター・木村匡

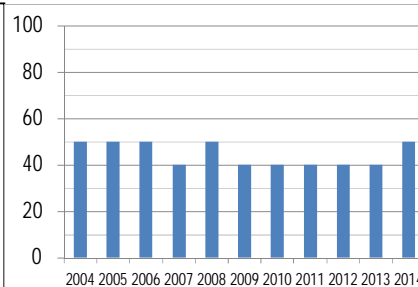
平均サンゴ被度は昨年と変わらないが、被度が少量減少した地点がやや多い。オニヒトデの観察数は昨年(573個体)から半減(213個体)するが、崎山湾等西表島西部で増加している。



嘉弥真島南のオニヒトデ食痕(St.31)

父島周辺(サイト18) 調査代表者:小笠原自然文化研究所・佐々木哲朗

軽微な白化現象が観察されたが、顕著な被害はなく、オニヒトデの食害や台風被害もなかった。平均サンゴ被度は昨年度から10ポイント増加。骨格異常等のサンゴの病気は全体の1%未満であった。



スギノキミドリイシの大群集(父島二見湾)